慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	河回別神クッノリ台詞（金宅圭・成炳禧本）
Sub Title	
Author	野村, 伸一(Nomura, Shinichi)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1983
Jtitle	三田國文 No.1 (1983. 1) ,p.61- 72
JaLC DOI	10.14991/002.19830100-0061
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19830100-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈資料紹介〉

河回別神クッノリ台詞（金宅圭・成炳禧本）

野村伸一

解題

韓国の仮面戯はいろいろな性格を帯びているが、本来の性格は、日本でいえば神楽のようなものと思われる。それが育くまれた場は農山村の神事という場であり、神を迎え、送る一連の儀礼の中に位置付けて見るのが、最も本質的のようである。

ところが、現存のタルノリは、日本の神楽の段階をはるかに越えてしまって、より演劇に近付いている。それは、十七、八世紀以降の都市における商人たちの台頭、かれらの庇護およびその心情の反映ということと無縁ではなく、また、朝鮮朝以降の社会全体が持った歴史的条件と密接に関係してもいる。

実際、タルノリの中の登場人物は誰一人黴臭くない。つい数十年前の洞内にはいくらも見られたような権力者、学者、幇間、遊び人、占い、被抑圧者、婆さん、伎女などが登場する。そのせりふは非常に生彩に富み、取りすました所は少しもない。ただ多分に即興性を帯びているため、演技のたびごとにいくらかずつの違いがどうしても生じる。

そこで、タルノリについて論じる場合には、数種の台本の突き合わせということが必要不可欠になる。

私にとって現存のタルノリの中で、最も興味深いものの一つは、河回タルノリである。これはかつて慶尚北道安東郡豊川面河回洞という村で行なわれていたタルノリである。

私は、幸い、機会に恵まれて、河回のタルノリに関する異種の台本の比較対照の結果を、『芸文研究』四三号に載せることができた。しかし、残念ながらそれはあくまでも「解題」のようなものであり、タルノリそのものの面白さを伝えることができなかったのではないかと思う。

タルノリは、私には、研究などという以前に第一に面白いものであり、それを知ってもらいたいと思うあまり、以下に拙訳を試みた。この台本は最も新しいものである。すなわち、原本は、一九七八年に、金宅圭、成炳禧の共名により出された「河回別神굿놀이調査報告」という二〇頁ほどのまとまりのよい小冊子である。入手も困難である上、この台詞を覚えていて提供した李昌熙翁が、おそらく最後の証人と思われることから、以後に新しい台本はもう出てこ

ないであろう。

そこで私はこの報告書の後半の台詞の箇所を試みに訳してみた。ぎこちない文ではあるが、何とか読みとってさえいただければ、なまじいの解題よりは台詞そのものがタルノリの大らかで楽しい味わいをよく伝えてくれるものと信じたい。

（翻訳）

一、降神

大工が松の木を厳選し、新しく棒受けを作ると、山主が、それを持つ。広大二名がソナン棒を担ぎ、城隍堂に登って行く。山主と広大全員は、笠を被り、周衣を着ているが、閣氏広大だけは、笠も被らず、少年の平服姿である。

ソナン棒は、城隍堂の前側の軒下で、コウム台（棒受けのこと）の上に置かれる。山主は、これに堂鈴を付けてから、両手で棒を摑んで、堂の中にはいり、壁に凭せて立て、降神を祈願する。このとき、広大たちは、大広大、閣氏広大、両班広大、学者広大の順で、城隍堂の前に横一列に並ぶ。山主が再拝し、合掌して、ソナン神に祈る。

山主が、「海東朝鮮国慶尚北道安東郡豊川面河回洞戊辰生城隍様……お降りください、お降りください……」と唱えながら、部落の安寧秩序と、豊農のためのクッ遊びをするつもりですから、助けたまえという内容を、即興的なことばで祈願する。そして、山主が、「棒受け」を手に持ち、真心を込めると、暫くして「堂鈴」が鳴る。全員が降神したことを知り、心の中で喜ぶ。山主は再拝し、堂から退り、再度、拝礼するが、広大たちは皆一斉に再拝する。山主は、堂鈴をソナン棒の先端に移し、先頭に立って下山する。「閣氏」は、長い絹の手拭を両肩にかけて、袖の下から垂らし、それをひらひらさせながら、手を上下させ、〈手踊り〉をする。このとき、「閣氏」を支えている〈支え手〉は、踊りはしない。国神堂、三神堂を巡り、洞舎に到ると、ソナン棒を洞舎の軒に凭せかけ、やはり、コウム台の上に置く。同時に、山主は、奉納された何着かの衣服をソナン棒にくくりつける。

＊ソナン棒には、堂鈴以外には何も付けておらず、巫堂も参加しない。

二、舞童マダン

暫くしてから、広大たちはそれぞれ青広大が持ってきておいた容れ物から、自分の仮面を取り出し、被り、別神クッあそびをする準備を急ぎ、ある者は、鉦、太鼓、銅鑼などを持ち、農楽を奏でる。「閣氏」も仮面を被り、また〈舞童をし〉、踊るが、そののち、他の広大が持ってきてくれた鉦と竹棒を取り、観衆の前を巡りながら、乞粒をする。乞粒に応じない人の前では、鉦を叩き、催促する。すると、人々は我先に乞粒に応じる。金を貰うときは、「舞童支え」が膝を折る。すると閣氏の手が届く。このようにして乞粒した銭や穀物はすべて別神行事に使われる。

＊山主は下山するとき、国神堂と三神堂には行かず、有司と広大たちだけが行く。このように、国神堂と三神堂には、ただ一度、立ち寄るだけである。

ソナンに掛けた服や布などは非常に数が多く、ソナン棒は大荷物になる。巫堂は、一月の七日か八日頃に到着し、十五日までの間、広大と行事を共にしながら、あそびに加わるが、大した仕事はまだ

なく、男の巫堂は鉦を女の巫堂は腰鼓を打ち、リズムをとってやる。閣氏は時折肩から降りて、観衆の前を巡りながら乞粒をする。この閣氏の乞粒は、すべてのマダンを終えるときまで随時行なわれる。

三、チュジマダン

一対のチュジが、麻袋のような袋を頭から被って登場し、一周して向き合い、踊る。袋の上の方に、手を出す穴があり、そこから手首を突き出し、手には、雉の羽根が一杯に差さったチュジの仮面を持っている。ぴょんぴょん跳びながら、争う仕種をもし、互いに口を噛み、取っ組み合い、身を捩ったりもする。このときチュジ仮面の口が開閉し、パクパクという音がする。チョレンイが登場してこれを目撃し、「フィーフィー」と言い、チュジを追い払う。チュジは互いに跳びはねながら争うが、一頭がへとへとになり倒れると、もう一頭がその上へ乗り、性交するような真似をして争う。そしてもう一頭が反対の方向にひっくり返る。暫くして、チョレンイの「フィーフィー」という声を聞いて、むっくり起き上がり退場する。そののち、チョレンイは、ひとしきり、軽々しく踊ってから中へ引っ込む。

この「チュジ踊り」は、体は龍、頭は虎のようなかっこうをした鬼神の踊りだともいい、さらに、雉の争いだともいう。金持の家に招かれて行きあそぶときには、チュジが穀物俵や釜のふた、服などを銜えて引っ張ると、城隍神のために必要だと信じて、すみやかに出してくれる。しかし、戊辰年には、そうしたことは別になかった。

四、白丁（ペクチョン）マダン

白丁が、斧と刀を入れた背負い袋を担いで出てきて、空を見上げ、太っ腹の笑いをし、毒々しい感じの踊りをひとしきりする。このとき、黄牛一頭がのそのそと出てくる。白丁は、牛を見つけて、ウォーウォーと叫び、本能的に牛をめがけて飛びかかるが、ややあって、角に突かれて倒れる。白丁は、怒って、むっくと起き上がり、斧を振り上げ、牛をたちまちに殺す。刀を研いで、牛の皮をすばやく剝ぎ、六角（二つの角、四本の足）を切り取り、また、心臓と睾丸を切り、袋に入れると、立ち上がり、気持良さそうに笑い、太っ腹な踊りをひとしきり踊る。そして、心臓と睾丸を手に把み、観衆に向かって、叫ぶ。

白丁：御覧なさい、生員（せんせい）たち、心臓をお買いなさい、心臓ですよ。まだ温かくて、このまま刻んで膾にして食うも良し、焼肉の中では、牛の心臓が最高ですよ、誰か焼肉用に買いませんか……。ヘヘヘヘ……。誰も買いませんか。じゃあ、心臓は買って食べるのではなく、肝も心臓もない両班さま、買って入れてごらんなさいよ。人のものより大きく、五臓六腑のない両班には五臓六腑が生まれ、恥じらいのない両班には恥じが生まれますから、ヘヘヘヘ……。ここにいる両班たちはみんな五臓も肝もちゃんとくっついている両班たちのようですが、それじゃあ、本物のきんたま（ウラン）お買いなさいよ、きんたまをね。えっ、きんたま（ウラン）を御存知（なにする）ない？　牛のせがれのことでさ。味も良く、喰らえば陽気に良く、老いくたびれた両班が若い嫁さん二人も連れて暮らすにゃ、この牛のむすこがなきゃ、どうにも

なりませんよ。ええい、他人の目を何だって気になさいますかそんなことやめて、さあさ、お買いください、さあさあ……。自腹を切って、なにする力をかき立てようとするのに、誰が差し出口をしましょうか。へへへへ……。孔子様だって、子供を持って暮らしたでしょ？　子供を見たいなら、陽気が萎えちまわぬうちに、するしかないでしょうに……。へへへへ、あん畜生の三文の値打もない体面のおかげで、おれさまの商売上がったりさ、上がったりさ……。えええい、商売もうまくゆかないし、踊りでもうんと踊っていかにゃならんよ。

袋に入れておいた刀と斧を取り出し、振り回しながら、ひとしきり踊る。そして、雷の音に驚き、あたふたと逃げて行く。

＊白丁が牛の睾丸を持って、観衆に買えと勧めると、このとき、観衆は、金を投げてやり、牛の睾丸をもらうふりをする。これも乞粒なのである。この乞粒もやはり、別神クッ行事に使われる。

＊白丁の刀と斧は、木で作ったものである。

＊李昌熙翁は、白丁がイメの仮面を被って登場するというが、まちがいのようである。もしそうであれば、白丁の仮面は、使われるときがなくイメの仮面が白丁役を引き受けることになる。

五、婆さんマダン

杓子のような器を腰に差した婆さんが、登場し、機を織る。一生を苛酷に生きてきたことの身世打鈴を機織り歌に載せて、うら悲しく歌う。

本当の機はないが、機に用いる糸巻きと筬を手に持ち、機を織る仕種をする。頭には、白い手拭を被り、腰がむき出しになっている。

婆さん：春（人名）よ、春よ、玉堂春よ　城隍堂の神霊様は　短い春の　春なのか　嫁に来て、三日目に　かかること　またとあるものか　十五歳に　なったばかりで　やもめとなると　知ったならば　嫁に来る娘は　誰かいる　筬を取り　打つその音は　ええ胸ふさぐも　これぞ宿運　一生涯を　姑ににらまれ　機の足は　二つの足よ　わたしの足　ふたつの足は　（亭主と）　ひとつがいになった　二足よ〈私たちは一緒に寝たの意味、訳注〉　亭主よ　亭主よ　筬を取り　打つその音は　郎君の　そのお声　日々の暮らしが　どうであるかと　ええ　おお　おたずねなさるな　嫁に来た日に　着ていた裳の　桃色の裳は　泣きの涙になってしまい　深紅の裳は　ふきんとなっちまったのに　日々の暮らし　語るもやめよ　三代の独女〈一人娘が三代続いたの意、訳注〉　ひとり子の娘　嫁に来てから　三日目に　うら若きやもめとは　どうしたことか　あの両班の家で　下仕えの暮らし　下仕えの暮らしで　長らえたいのちを　かつかつつないで、生きてはいても、日に三度の食事は　ほんの少々　四月の炎天　長い日を　痩せ細り　腹すかし　あの学者の家で　下仕えの暮らし　ほんとに　ほんとに　独守空房で　食べてはいけない　筬を取り　打つこの音よ　死ぬに死なれぬこんないのちもぶじ過ぎて行く

婆さんは、歌い終えると、ひゅーと、一息入れてから、虚ろに空を仰ぐ。そのとき、見物して立っていた観衆の中から（戊辰年には大広大が）、

観衆：婆さんや、機織りは終わったかいな。
婆さん：（力ない声で）機は織ったけどねえ……。
観衆：婆さんよ、きのう市場へ行って、買ってきたにしんは、みんな食っちまったかい。
婆さん：ゆんべ、あんたが一匹、あたしが九匹、けさは、あたし九匹、あんた一匹、一束（ひとたば）みんな食ったじゃないか。

そして、婆さんは徐ろに立ち上がり、踊りながら、観衆の目の前に近付き、乞粒をする。

＊別神クッあそびにおける乞粒は、このように、閔氏と白丁と婆さんが行なう。

六、破戒僧マダン

「プネ」が手をくねらせながら歩いてくる。プネは伎女である。「手踊り」をしていたが、突然、小便をする場所を探す。辺りを見て、人が来ないのを確認すると、裳（ち）をたくし上げ、中腰になり、小便をする。このとき、「僧」が登場し、この光景を目撃する。「僧」は、見てはならぬものを見たかのように、珠数玉を繰りながら合掌し、南無阿弥陀仏、観世音菩薩を、黙って念じる。

そして、また、プネの方を眺めて、怪訝な顔をする。プネは、そのとき、生理的に、ぶるっと身震いをし、立ち上がり、びっくりしたかのように場所を移す。「僧」は、こうしていてはいけないという仕種をし、南無阿弥陀仏と言うが、すぐに、ええいどうでもいいや、とばかり、袖を振り、プネが小便した所に行き、土を掻き集め、片一方の掌に握る。その指の間からこぼれ落ちる土も、もう一方の手で拾い集め、結局、両手でその土を鼻先に近付け、臭いを嗅ぐ。

僧：うう、ふふふふ……

空を見上げ、大笑いをしてから、土を撒き散らし、手をはたき、プネの方を眺める。こうして僧は、肉欲をこらえきれないとばかり、身じろぎをし始める。僧は、プネの近くに行き、一緒に踊りでもしようというように、プネの肩をそっと揺さぶる。プネは、びっくりして避けながら、

プネ：ぽーッ〈いやという合図、訳注〉

と言い、遠く逃げて行く。僧は、すぐさま追いかけ、抱こうか、よそうかという身動きをして踊る。暫くすると、プネも、同感だとばかり、一緒になって踊り出す。

このとき、どこからともなく、ちょこちょこと、チョレンイが出てきて、踊っているうちにこの光景を目撃する。「ひでえもんだ、こんなことってあるのかな」というように、ぐるっと身を巡らして、膝を打ちげらげら笑う。

僧とプネは、チョレンイの目撃したことを知り、びっくりし、あわてふためく。僧は、プネを脇に抱え、逃げる。そのとき、プネの花ぐつの一つが脱げ落ちる。チョレンイは、馬鹿みたいに遊んでいたが、僧とプネが消え去ったことを知ると、四方をきょろきょろ見回し、やがて、花ぐつを発見する。きれいだなというように、あちこち手まさぐりしては、観衆の前に突き出し、

チョレンイ：御覧よ。これきれいでしょう？　これあげようか？

だめだよ。御覧よ。きれいだろう？　これ、お前にやろうか？　だめだ、へへへ……えいっ、坊主とプネとが踊って遊ぶ世の中だ、おれもうんと踊って遊ばなきゃ（独白）。

チョレンイは、暫く、おもしろそうに踊ってから、イメを呼びに出て行く。イメは、びっこを引き引き、まぬけた足取りで登場する。

チョレンイ：イメよ、イメ、おい、こいつ。

イメ：何だってんだい。こいつ。

チョレンイ：（耳打ちで）さっき、坊主とプネと、こんなふうに踊っていたが、おれが来たものだから、あっちにずらかっちまった。

チョレンイは両腕を広げ、僧の真似をする。

イメ：ほほほほ、おかしいな、おかしいや。

チョレンイ：イメよ。坊主とプネとが踊って遊ぶ世の中なんだ、おれたちも、うんと踊って遊ぼうぜ。

イメ：そうだ、そうだ。

イメとチョレンイは、暫く、おもしろく踊ってから退場する。

＊このマダンで、李昌熙翁は、チョレンイとイメの登場については、明らかな口述ができなかった。そこで、先に調査した人たちの資料を参考にして記述した。

＊プネが答えるとき、「うううーッ」は応諾。そして、いいという意味では「ぷおーッ」、ことわりの意味では「ぽーッ」という。

＊このマダンでは僧とプネは、せりふを全く使わず、黙劇で行なう。

七、両班、学者（ソンビ）マダン

両班、学者（ソンビ）、チョレンイ、プネが登場する。両班は、扇子を持ち、程子（ほうし）冠を被り、いばった足取り、外股で歩いてくる。学者は、儒巾（ほうし）を被り、毛扇（防寒具）を握り、きせるを持って出てくる。両班と学者は、顔を扇子と毛扇で半ば隠して出てくる。プネは、学者の後ろについて出てきて、学者の近くに行く。チョレンイは、プネの尻を撫でまわし、いかにも軽々しい。プネは、これを手で払い、逃げる。チョレンイは、両班と学者が立っている所で、行ったり来たりしながら、

チョレンイ：両班様たち、出ていらっしゃったついでに、あいさつをなさいよ。

こういうと、両班は学者を見て、

両班：わしら、互いに名を名告ろうや

学者（ソンビ）：やあ、そうしよう。

両班と学者は、礼を交わそうとして座る。このとき、チョレンイが、両班の頭に尻をくっつけて、あいさつをしながら、

チョレンイ：誰かいらっしゃいましたか？

と言うと、両班は、怒って、扇子でチョレンイの尻を殴り、「ええい、こいつ」と言い、どなる。

学者：あいつ、チョレンイめ、礼儀を知らないな

両班：いくら教えても、だめだろうよ。

チョレンイは、こごとを聴くと、プネの方に近付き、耳打ちして囁く。

チョレンイ：あいつだってあいさつ、おれだってあいさつ、あいさつをするのは同じなのに、何だってうるせえことを言うのかな。

このとき、プネはうなずいて、返事をする。

学者：やぁやぁ、プネや。

プネはこっそりと歩いて行き、学者の耳に口を当て、

プネ：ううーッ（強く声を出す）

学者：（どきっとして）ひゃあ、びっくりしたな、来たな、プネや。

と言って、プネの肩を揉むような動作をすると、プネは、学者の後ろに廻って、腕を揉み、時々、頭のしらみをも捕る。このとき、チョレンイが、両班の近くに行き、

チョレンイ：両班のだんなさん、肩をお揉みしましょうか？

と言うと、両班は、うれしそうな顔をして、うなずく。チョレンイは、乱暴に肩を揉み、また、膝で肩を押さえつける。

両班：ひゃあ、こいつ、肩がこわれちまう。

と言い、大騒ぎする。チョレンイは、両班の後ろで、うろちょろしながら、

チョレンイ：両班さん、両班さん、両班さんよ、おれのいうことをちょっと聞いてみてくださいよ、全くひでえはなしなんですよ。

両班：ほほー、こいつ、きょうに限って、何だってそうしゃべくるんだ？

チョレンイ：ほんとに、金輪際、見逃がせないことなんですよ、さっきですね、坊主の奴がプネにこんなふうにしていたかと思ったら、坊主め、プネを連れて、あっちへ行ったじゃないですか。

両班：なに？　なんだと？　ほほー、世も末だな。ほほうほう……。

両班は、おもしろくない顔を見せて、うろつく。

両班：やいやい、チョレンイや、こいつ、そこでひょこひょこしてないで、プネでも探してこい。

学者は、この話を聞いて、非常に不愉快な顔をし、くりかえし、毛扇を閉じたり、開けたりする。

チョレンイ：プネは来ませんでしたか？

プネは、両班の傍に行き、耳に口を当て、「ぷぉーッ」と言う。

両班：ええいっ、びっくりするな、鼓膜が裂けちまうよ。

プネが両班を見て、何々と囁くと、両班は、嬉しそうにこくりこくりする。プネは、両班の後ろに行って肩と腕を揉み、それから、後頭部のしらみ取りもする。

チョレンイ：え、やぁー、両班にもしらみがいるなぁ。

学者は、この光景を見て、非常におもしろくなく思う。

学者：チェ、チェ、あいつ！　くそっ、けしからん。

そのとき、両班は、そっと立ち上がり、プネも立ち上がる。両班は、学者にも聞えよがしに、プネに向かって、

両班：来たな、プネや、おほん、菊の咲く秋、楓はもみじ、気候も良くお体は健康でいらっしゃるが、ポジ（陰部、訳注）様がかぜを引いたによってチャジ（男根、訳注）両班がお見舞申す。

プネ：（恥ずかしそうに）ぷぉーッ

両班：ほうほー、あそこがもとで、悶着が絶えないから、見守ってやろうとやって来たのだ。樹木は欝愴として、赤紫の花はむっくりと咲き、そこにはいっていくと、白血を吐いて、死んじまうから、保護しようとやってきたのさ。

プネ：（身をくねくねと捩りながら）ぷぉーッ。

学者はこの光景を見て、おもしろからず、からせきをする。プネは、また学者にも、近付いて、ここに来たわよという動作をする。

学者：来たな、プネよ。

プネは、学者の耳に口を当て、淫らな動作をしながら、ぷぉーッと言う。学者は、満足したように、向い合う。

両班：なにィ？　あのソンビの奴めが。ほー、あの尻軽の妖婦めは、えへん。

プネは、学者に知られずに、両班の方に行く。

両班：そうだ、そうだ、プネよ。

プネ：ぷぉーッ

学者：えいっ、あ、あの助平な尼っ子、なにィ？　あの両班の奴……よう、両班、お前、よくも、おれの前でこんなことができるなァ。

両班：ほほうー、何がどうしたって？　それじゃ、お前んちの家門がおれんちくらいだってえのか？

学者：ああ、そうさ。どっちがましか。言って見ろよ。

両班：おれは、士大夫の子孫だぞ。

学者：なにィ？　何が何だって？　士大夫？　おれは八大夫の子孫さ。

両班：なにィ？　八大夫？　そうか、で、八大夫とは何だい？

学者：八大夫は士大夫の二倍さ。

両班：何が何だって？　おほん、おれのじいさまは、門下侍中を経歴なされたのだぞ。

学者：ああ、門下侍中ね。それっぽっきり……。うちのじいさまはちょうど門上侍大だよ。

両班：なにィ？　何が門上侍大だって？　そいつはまた何のことなんだ？

学者：えへん。門下よりは門上が高く、侍中よりは侍大がもっと大きいというわけさ。

両班：へん、ほんとうに馬鹿馬鹿しくて、聞いちゃいられないよ。そうかい、家門さえ高けりゃ、いいってえのか？

学者：えへん、それじゃ、ほかにまた、何があるってんだ？
両班：学識が必要さ、おれは四書三経をみんな読んだぞ。
学者：なに？それだけかい、四書三経だけね。えへん、おれは八書六経をみんな読んだぞ。
両班：なにィ？　なに？　八書六経？一体全体、八書ってのはどこにあってそもそも六経ってのはまた何のことだ？
チョレンイ：おれでも知っている六経なのに、それも御存知ありませんか？……八万大経、坊主のあほだら経、めくらの眼鏡、薬局の桔梗、むすめの月経、作男（モスム）の年給のことでさ。
学者：そうだ。こいつらも知ってる六経を両班ともあろう者が知らないのか？

＊李昌熙翁は、このことばについて、城隍様を祀る浄い所には、月経のある女性もいるから、とてもこんなことば（月経）は使うことができないと言っている。

両班：（暫くしてから）よう、よう学者（ソンビ）よ、けんかはどうやら五分五分のようだし、ここらでひとつあっちにいるプネでも呼んで、踊って遊ぼうや。
学者：ああ、いいともさ。やーッ、プネや。

プネは、両班、学者の方に行く。プネと両班、学者、それにチョレンイが踊る。このとき、婆さんが杓子のようなものを持ってびっこを引き、尻を振り振り出てくる。婆さんは、踊りの様子を見て、一緒に踊りたくなり、両班に近付く。両班は、夢中に遊んでいたが、見ると、プネはいず、婆さんが前に来ているのを知って、力一杯、押しのける。押しのけられた婆さんは、両班の方に指差しをし、両班をののしってから、学者の傍に行く。学者もひとしきり遊んでから見ると、傍に婆さんが来ているのに気付いて、腹を立て、力一杯押しのける。

婆さん：ええいっ、こいつめ、お前もあいつとおんなじだねぇ、ちえっ、帰ろう帰ろう。

婆さんが帰ろうとしたとき、チョレンイが出てきて、
チョレンイ：婆さんよ、どこへ行くんかいの？
婆さん：こいつらのこのざまが見たくなくて、帰ろうとしたのさ。
チョレンイ：婆さんよ、帰っちまわずに、おれと踊りでもして、遊ぶのはどうだい？
婆さん：そうだね、そうだね、チョレンイが一番だね。おれのころはチョレンイが知っている。

両班、学者、チョレンイ、プネ、婆さんが一緒に踊る。そのとき、白丁が背負い袋に睾丸を入れて持って出てくる。

白丁：へへへ。このざまはほんとにおもしろいぞ、いいなぁ。へへへ、生員（だんな）さんたち、きんたまお買いなさいよ。
両班：なんだと？　こいつ、ほんとにゆかいにやっているところへ、きんたまだと？……
白丁：きんたまも御存知ありませんか？

このとき、チョレンイがさっと走り出て、
チョレンイ：へへへ、鶏卵、きん玉、鳥卵、大監のごついきんたまでさ。
白丁：へへへ、そうだ、そのとおり、きんたまですよ、きんたま。
学者：こいつきんたまだって？
白丁：牛のきんたまも御存知ありませんか。
両班：こいつ、下品にも、牛のきんたまだと？……買わんから、とっとと消え失せろ。
白丁：生員さん方、牛のきんたまを食べれば、陽気にいいというのに。

そのとき、学者がぐっと身を乗り出し、白丁の手の中にある牛の睾丸を掴みながら、
学者：何だと？　陽気にいいって？　じゃ、おれが買おう。
両班：ほほうー、こいつは、さっき、まず、おれに向かって、買えと言ったから、これはおれのきんたまだぞ。
学者：何だと？　これはおれのきんたまだよ。
両班と学者は互いに牛の睾丸を掴んで引き合う。
白丁：ええいっ、おれのきんたまが裂けちゃうよ。
互いに引き合っているうちに、牛の睾丸が地に落ちるや、後ろで眺めていた婆さんが、歩いて来て、それを拾い上げ、
婆さん：チェチェチェチェ、牛のきんたま一つをめぐって、両班は自分のものだと言うし、学者も自分のきんたまだと言うし、白丁のやつもてめえのきんたまだと言うんじゃ、一体、このきんたまは、だれのものなんだい。六〇歳まで生きていたが、牛のきんたま一つで、けんかをするざまは、初めて見た、初めて見た。ああ、こいつらったら。

全員、恥ずかしそうな顔で退場しようとする。このとき、イメ（別者？）が登場し、
イメ：還財返せ、還財返せ。
と大声で叫ぶ。誰もかれもうろたえて、四方に散らばり、逃げて行く。「イメ」は逃げて行く婆さんをこの上もなくおどしつける。

＊李昌熙翁は、このマダンでは、両班、学者、チョレンイ、プネが登場し、最後にイメが出てきて、広大たちを退場させるというが、その間の記憶が一定せず、その上、白丁がイメの仮面を被るというなど、はっきりしていないため、前に調査した人たちの資料を参考にした。

＊李昌熙翁は、富有な家に招かれて行き、遊ぶときは、学者広大と家の主人である両班が向い合ってすわり、文字を書き、問答をやりとりしたが、いつも家の主人を困らしてやったという。
戊辰年の別神クッあそびのときに、大広大と両班広大、学者広大が互いに、「今年は両班たちをほんとうにやっつけてやろう」と話し合ったが、柳氏たちの反対でできず、その前の、甲午年に別神クッをしたときも、これは実現できなかったという。

＊李昌熙翁によると、河回で、最も勢いの良かった家は、謙庵宅、西厓

宅、南村宅、北村宅で、これらの大家は、前庭が広く、招かれると、その板の間でも遊ぶことができ、終日、遊ぶという。しかし、戊辰年には、板の間では遊ばなかったという。そのほかの家に招かれたときは、全マダンが上演できず、……〈この部分、原文の複写不明で訳出できず〉終日、一軒の家で遊ぶときは、農楽を奏で、地神も踏み、また、クッあそびもし、さらに、酒やごちそうを飲み食いしたりもする。そして、冬の日は短いから、ふるまいを受けたかと思うと、日が沈んでいくという。

＊この両班、学者マダンまでの六マダンが、村中の人たちが、ともに娯しめる「別神あそび」であり、次の「堂祭」は、マダンとは言わず、その次に行なわれる「婚礼」「新房」マダンは、〈この部分、原文の複写不明〉深夜に行なわれたというから、一種の秘儀と見られる。

八、堂祭

正月十五日の朝食をとり、午前十時頃になると、城隍堂へ出かけ、堂祭を執行する。この堂祭は、終日行なう。祭床には、餅（粳米で作った蒸餅、三、四升分）と三果実（棗、乾柿、栗）を置く。山主と二名の有司、そして不浄のないおとなが参与する。堂祭は、他姓堂祭といい、柳氏は参加できない。堂内の点灯には、ごま油に紙芯を立てたものを使う。焼紙は五〇枚余りだが、まず第一に、村の文章焼紙から始め、戸主焼紙、広大個々人の焼紙、果ては、牛、馬、車の焼紙まであげる。

見物人たちは、遠く城隍堂を取り囲み、見ているが、広大たちは、堂祭とは関係なく城隍を巡りながら、農楽を奏で、閣氏は舞童として乗り、乞粒をする。

こうして、夕方になると、洞舎の前に下山してくる。ここで、広大たちは、それぞれの仮面を脱ぎ、青広大に返納し、三々五々、十五日ぶりに家に戻る。ただし、有司、青広大、両班広大、閣氏広大だけは居残る。細々とした仕事は、めんどうなことを手際よく捌く二人の沙工（船頭）が引き受ける。

九、婚礼マダン

夕食を済まして、午後八時、九時頃になると、見物の者たちも、ほとんど家に帰り、幾人も残っていない。藁で作った筵が敷いてあり、その上で、「婚禮」マダンが始まる。腰鼓（チャング）二つを揃えて置いた前に、仮面を脱いだ両班広大が立ち、式次第を述べ、閣氏広大が新婦の役で立ち、「郎子」（新郎）には、青広大が立った（青広大には、子供のいない人がなる。青広大はまた新郎の役で、「婚禮マダン」に参与するが、そのとき、どんな仮面を使ったのかは、暗いために、全くわからないと李昌熙翁はいう）。近くには、松明が燃えているが、それはものが見えるか見えないかというくらいの明りである。二つの腰鼓の上には、花笠が二つ、飾りとして置かれてある。

この「婚禮マダン」と次の「新房マダン」は、十五歳の処女である城隍神（または十五歳の寡婦である城隍神）を慰めるために行なわれる。

婚禮マダンが終わると、式次第を読み上げた両班広大も家に戻り、閣氏広大と郎子である青広大、そして村の手伝いである船頭たちだけが残り、見物人の方も僅かの者が取り囲むばかりとなる。

十、新房マダン

新房マダンも、婚禮マダンが執行された筵の上で行なわれる。郎子と閣氏が初夜の性行為を行なう。時々閣氏が「痛い、痛い」と声をあげた。郎子は慎重に、まじめに模擬性行為をする。

この時分になると、青少年たちは皆家に戻り、近くの村から来た見物人たちも、親戚の家を尋ねて行き、あとは、村の壮年たちの何人かだけが残って見物する。

十一、道のあそび（ホチョンコリクツ）

新房マダンが終わると、巫堂（ムーダン）によって、村の入口のホッチョンで「道のあそび」が、行なわれる。巫堂は、女巫一名、男覡三名で、別神クッあそびをする十五日の間に、村に入り込んだ雑鬼を追い払うクッが行なわれる。そこには、有司二名と手伝い二名ほどが残り、後片付けをする。

＊この、ホッチョンコリクッは、村の入口の外側で行なうのがふつうだが、時には、城隍堂の下とか、使っていない畑の上で行なったりもする。